
青春桜花 ~とあるサバゲーチームの戦歴~

回遊魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春桜花～とあるサバゲーチームの戦歴～

【NNコード】

N9577V

【作者名】

回遊魚

【あらすじ】

高校生になつたばかりの海渡 京谷は『あること』が原因でサバゲーチーム『アステリオン』に入隊することになつてしまつた。

「サバゲーの世界は甘くないよ？ 基本ルールさえ守ればなにやつても許されるからね」

サバイバルゲームは決して遊びでも、スポーツでもない。まさにサバイバルそのもの！ はたして京谷は、アステリオンは強豪チーム相手に生き残ることができるのか！？

笑いあり、バトルあり、感動とラブも……あるかもしない。多分。

やがても壁間に立つのが、

トリガー～すべての始まり～（前書き）

はじめまして回遊魚です。読みにくかつたり、解りずらかつたりするかも知れませんが、お付き合いください。

トリガー～すべての始まり～

暖かい陽気に誘われて、花が芽吹き、咲く季節 春
別れと出会い、そして、新天地での不安と希望で胸を躍らせる季節でもあるこの時期に俺、うみわたり海渡きよしお京谷は高校生になった。
良くもなれば、悪くもない。そこそここのレベルの高校の普通科。家からは若干遠かっただが、少なくとも現段階では不安などなく、むしろ希望に満ちていた。

新しい出会い、毎日とまではいかなくとも友人たちとバカ騒ぎする日々、学校行事、など『青春』の一言で括れるような事で頭がいっぱいだつた。最初の頃は俺に関する『あること』で勘違いされるかもしねえ。でも、中学の時と同じように時間が誤解を解いてくれると疑わなかつた。しかし……

その『あること』がこれから始まる苦澀と苦惱への引き金になつてしまつとは思ひも寄らなかつた。

事の発端は入学初日、帰りのホームルームが終わり、いざ帰ろうと教室の出口から出ようとした時だ。

背後から突然まわされた華奢な腕、感じる人の温もり、そして背中に感じる柔らかい感触。

いきなり女子に抱き着かれた。

……と最初は思つたが、後から考へるとアレはじ〇〇をかけられた。というべきだらう。

軽く、ビリロか思いつきり首絞めてたし……。

そりやあ驚いて引き離さうともがいたせ、

「お、おーー？　いきなつにしひ……！？」

そうしたらアイツは鼻と口をハンカチで押さえてきた。わずかに湿ったハンカチ、それが当てられたとたん意識が遠のいてく感覚があった。そう、もしかしてじゃなくとも漫画やドラマなんかで使われる『あの薬品』だ。いったいどこで入手したのやら……。

「ミクシコンコンピューター」

完全に意識が無くなる直前、アイツはもう語りしさにそんなこと言っていたような気がする。

さて、頭痛と共に目覚めると。パイプ椅子に座らされていた。そこはいい。だが、手足が縛られているのはいったいどうこいつである？

「えっ？　なんだこれ！？」

田の前には教室で使う机と同じ物が向かい合わせに一つ並べられている。そしてその上に謎の書類が……。

「あっ、起きたんだ。改めまして、私の名前は松永まつながひより。君と同じクラスだよ」

アイツは最初、窓に寄りかかっていた。春の暖かな風に長い髪をたなびかせていた彼女は、優しげで、どこか凛とした印象を受けた。美人と表現するより、かわいいと表現する方が似合ってるかもしれない。

それはさておき……

「おー、こ、これはどうこうだ？　監禁か！？　身代金が目的なのかつ！？」

状況を見れば当然そうなる。が、

「全然違うよ？　ちょっとお話をあるだけ」

「話？」

アイツ 松永は向かい側の席に座り、置いてあつた謎の書類を差し出した。

「とりあえずこれ読んで」

「サバイバルゲーム普及委員会選手登録書。海渡 京谷をチーム『アステリオン』のメンバーとして登録します？」

「入ってくれないかな？ 君こういうの好きでしょ？」

「ああ、なんとなく予想が……いや、希望を持とう。決して『あること』に関係しないと願つて」

「なんでそうなるんだ？」

「だつて、その眼帯は例の『あの病氣』……」

ハハツ、やつぱりそれか。中学では「これのせいで『厨一病』呼ばわりにされ、誤解を解くのにどれだけの時間がかかったと思つている？ いや、それはまだいい。問題は不良に絡まれることが多かつたことだつ！ とにかく苦労したぞ、それでもめげずにこうして明るく生きてきた。だがな、やはり偏見を持つヤツは嫌いだ！ なぜ、人は少ない情報でしか物事を見ることができないのだ？ 自ら作り出した幻を絶対と信じ、真実を見ようともしないつ！ ああ、なんという愚行……！」

「これは『デフォルト』だあああああああああああああ！」

「そういう設定なの？」

「設定じゃねえよ！ 小さい時の事故で見えないの！ お解り？ ええつ！？」

「……そんなに大声でも叫ばなくとも……」

「あつ……」

松永の目は若干潤んでいた。怒りに任せ少しやり過ぎてしまつたと思い。謝ろうとした直後、

「それはさておき」

「テメエ、この野郎……！」

ほんとにあつさり表情を戻しやがった。なんだろう？ すつごい

ムカツク

「とにかく、きょうやんには『アステリオン』のメンバーに入つてもううよ?」

「断る。頼むんだ。たらも」と真面な頼み方をしろ！」

人を拘束しておいてコイツはなにを言つてゐるのだ？ それに俺
はサバゲーに興味はない。

「そんなこと聞かせやつて良いのかな？」
「あ、ううん」

不敵な笑みを口元にうかへる松永 なんだ？
感がする。そう、とてもやな…… なにかやな予

「どうこうだ？」

「問題。ここは普段使われない教室です」

なるほど、段ボールが多いのはそのせいが、ほこりつぼいのも納得がいくな。

「さて、そんな教室に男女が一人ずついます。女性の方が服装を乱して悲鳴を上げると男性の方はどうなるでしょう?」

そう言つて松永は整つた服装を乱した。俺の思考かほんの一瞬、停止した。

が、まつてくれ、今提示されたキーワードから答えを導き出せりう
としているところなんだ。ほんのちょっとだけ……。
導き出された答えは悲惨なものだつた。

社会的抹殺、極刑、人間の底辺……。

「…」
「…」
「…」

「うん、これからまたしょね。あくまでも」

これがすべての苦労と苦悩の始まり。サバゲーチーム『アステリオン』への入隊だった。

だが、俺はまだ知らなかつたのだ。サバイバルゲームは遊びでも、スポーツでもない。まさにサバイバルそのものだということを。

トリガー～すべての始まり～（後書き）

意見、感想はもちろん、その他のこともあれば遠慮なくどうぞ。

更新ペースは2週間くらいを予定。

あくまで予定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9577v/>

青春桜花 ~とあるサバゲーチームの戦歴~

2011年8月23日03時16分発行